衣服の着心地に関する教育プログラムをめざした研究

教育デザインコース　家政領域　中田　いずみ

１．研究の背景と目的　現状の家庭科の衣生活内容において、生徒自身の身体の安全や健康を守るための「着心地・快適性」は、文献調査（小中高過去３改訂分の学習指導要領およびそれに対応する高等学校家庭科教科書）より、家庭科の衣生活分野の授業において生徒の生活に密着している衣服の着心地に関わる単元の重要性が高まっていることがうかがえる。しかしながら、衣生活に関するアンケート調査(神奈川県内の高校生247名:2012年10月実施、同内大学生249名2012年10月~2月実施)より、学習する素材の選択や衣服の着方などの知識が、実生活に活用されていないことが問題点として浮き彫りとなった。また、一昨年の震災や度重なる異常気象による天災を機に生徒らはファッション性や社会規範と比較して着心地・快適性を優先すべき事例を経験しており、今こそ、着心地に関する学習の機会の充実を図る時であると考える。そこで、授業実践の時期に合わせ、暑熱環境下での快適な衣生活に焦点を絞って授業実践を行いたいと考え、教育プログラムの開発を行った。快適な衣生活を送る上で、被服の着心地が大切であることに関心を持たせるとともに、着心地のよさには素材とデザインを含めた着方の工夫が重要であることに気づかせ、着心地について考え、より快適な衣生活を工夫できる実践力を習得させることができるような授業を模索したいと考え、教育プログラムの試案を開発し、授業実践を通して学習教材および教育プログラムとしての効果と課題について考察する。

２．授業の実践について

・プログラムのテーマ　「素材と着方を工夫して着心地を考える～暑い夏を快適にすごそう！～」

・授業実践　2013年7月に神奈川県内の県立高等学校の家庭基礎5講座（167名(男子71名、女子96名)）を対象に実施。

・授業の評価　授業の前後にアンケート調査を実施(有効回答数139名(有効回答率83.23%))。

・解析方法　授業の感想の自由記述の集計及びアンケート20項目(5件法)についてSPSSver.20を用いて授業前後の平均値の差の検定他を行った。

３．教育プログラムの試案について　生徒に身近な被服を示したうえで、その性能のみを伝えるのではなく、肌着を回覧させて実際に接触温冷感の違いを体験させたり、スポーツウエアがいつも着ているものと何が違うのか、列ごとに考えさせたり、考えさせたうえで、その根拠となる実験の映像や結果を感覚的、視覚的に学べるような着衣の研究を行い、教育プログラムの開発を試みた。

４．授業の評価から考察する今後の課題について

素材の工夫である「湿気・水の流れ」に関わる項目については、導入で、蒸れると着心地が悪いことをポリ袋を用いた実験を全員が体験したこともあり、授業前後の平均値の差の検定を行ったところ、有意に着心地に関わる項目への理解度が上昇していた。しかしながら、デザインを含む着方の工夫である「空気の流れ」に関わる項目については、スポーツウエアの実物を触ったり、視覚的に空気の流れを示したものの、生徒一人一人が肌に触れて「空気の流れ」に伴う着心地を感じる実体験はできなかったため、理解度につなげることができなかった。目に見えない空気の流れをより実体験として感じ、着心地に結び付けて考えられる教材の工夫が更に必要であることが今後の課題である。また、自由記述の感想において、着方の重要性を実感した記述が見られ、本プログラムの課題であったデザインを含む着方を工夫して着心地を考え、快適な衣生活につなげるという授業の目標が概ね達成されたことが伺えた。

５．教育デザインフォーラムでの発表を通して

家政領域に加えて、他領域の方にも発表を通して意見をいただくことができ、大変有意義な機会となった。今後更に研究を深め、修士論文としてまとめていきたい。なお、ポスターは下記URLに掲載

http://ynu-satsumoto-labo.ynu.ac.jp/down/resume/20131022poster.pdf